

十．秋が去って

年末になると急に冷え込んだ。圭介は正月休みを一人で寮で過ごした。年末年始の休みの間、各個室の暖房は切れた。娯楽室と読書室だけが暖かだった。朝夕の食事は何とか食べさせてもらえた。昼食用にはインスタントラーメンを買い込んであった。

例年は、故郷に帰るか友人とスキーに行くかして正月休みを過ごしていた圭介だったが、今年はどうしてもその気になれなかった。工事を終えて帰って来た圭介に、脱力感が取り付いて離れないのだった。そして、通り抜けて行ったあの秋の日々が、圭介の頭の中に居座っていた。

あの秋の日々を過ごした地を去る前日の夜、圭介は武藤陽子と駅前の喫茶店で会っていた。

「私、女学生の頃は詩を作るのが好きだったわ」

陽子は伏目がちに話し始めた。本当は大学へ行きたかったのだが、家庭の事情がそれを許さなかったので、父親の友人の紹介でこの工場に就職したのだった。

「それでも私は進学を諦めなかったわ。毎月のお給料をずっと貯めてきたの。自分で学費を出すと言ったら父もきっと許してくれると思って」

「それで、許してくれたの？」

「くれたわ」

陽子の話はさらに続いた。

就職して三年、四年と経つ間に彼女は工場の人たちの暖かい輪の中に入っていた。輪の中は居心地が良かった。縁談の話もいくつか上役から持ち込まれた。そんな環境の中で陽子は進学の思いを捨てようかという気持ちに傾き始めていた。

河島や圭介たちが工場に姿を見せ始めたのはその頃だった。

「工場の人たちの暖かい輪が崩れ始めたのは、その頃からだったんじゃないかしら。それまでは高木さんも秋山さんも仲が良かったのよ……」

「……」

「そうね、どんな風に言ったら良いのかしら……」

陽子はちょっと首を傾げた。目は何か遠くのものを追っているようだった。

「暖かい空気に充ち溢れているお部屋の一隅から、冷たい隙間風が少しずつ吹き込んでいるという感じがしら……。それが、時が経つにつれて冷たい空気がだんだん多くなってくるのね」

「そして今は部屋の中は冷たい空気ばかりというわけやね」

いきなり口を挟んだ圭介に陽子は小さく頷いた。

「でも、私が会社を辞めようと思ったのはそのためじゃないのよ」

そこまで言うとは陽子は顔を上げて、自分を見ている圭介の顔をじっと見つめた。ほんの短い時間だったが二人の眼差しが暖かく溶け合った。再び目を伏せて陽子が話し始めた。

「あなたの目を見て私は昔のことを思い出したの。あなたの目は見ている対象によって変わるのね。青空を見上げているあなたの目、林の梢を見ているあなたの目、汗を流して一生懸命働いているあなたの目、何かを考え込んでいるあなたの目、夕日が沈むのを見ているあなたの目、みんな違う目だわ。私はそういうあなたの目に触れているうちに、詩を作るのが好きだった頃のことを思い出したの。そして、やっぱり大学へ行って文学の勉強がしたいという気持ちが抑えきれなくなったの……」

「……」

「四年間溜めてきたお給料をそのままにしておいて良かったわ……」

ほっと一息ついて陽子は圭介を上目づかいに見た。圭介の小さいたずらっ気が頭をもたげた。

「ほおっ、ぼくの目はそんな立派な目やったのかぁ……。しかし、どうして女の子たちは文学なんてものに興味を持つんやろうなあ。ぼくらがやってるみたいな生産的なものに、なぜそっぽを向くんやろう……」

陽子の目がキラッと光ったのを圭介は感じ取った。返ってきた言葉は圭介の心を刺し貫く鋭さを含んでいた。

「真藤さん……。あなたたちは、ああいう機械を造って生産的な仕事をしたと思っていらっしゃるんでしょう。だけど、その時あなたたちが壊していったものに未だ気付いていらっしゃらないのよね。その壊されたものの方が余程大切だと思っている人たちも大勢いるのよ……。文学の心を少しでも持っている人だったら、こんなことはすぐ分かるのに……」

「……」

圭介は言葉を失った。あの秋の日々が無秩序に圭介の頭の中に押し寄せた。青空に揺れる雑木林の梢、グラウンドの脱力感、枯れ草の中の幻想、オレンジ色の杉の梢、高木、秋山、北山、そして激しい肉体労働……。混乱した圭介の頭の中で何かが収斂し始めた。あの秋の日々は溶けて一つになっていくようだった。そうか、そうだったのか。頭脳の歓喜とは裏腹に圭介の心は沈んでいった。陽子の存在がにわかに遠くなっていくように感じられた。

喫茶店を出たところで圭介は別れるつもりでいた。

「ありがとう。……きっともう会うことはないやろうね……。しっかり勉強してな……」

陽子は圭介の顔をじっと見つめた。わずかの沈黙の後、陽子が両手を差し出した。当然のように圭介はその手を握りしめた。柔らかい手だった。そのままじっとして

いると、両腕を引き寄せたくなる衝動が圭介を襲って来そうだった。

「ごめんなさいね・・・・・・」

「・・・・・・」

駅まで一緒に行くという陽子の手を離し、圭介は別れを告げた。「・・・・・・さようなら・・・・・・」と言って無理に笑った陽子の顔が寂しそうだった。広場を小走りに横切り、階段を駆け上がった所で圭介は振り返った。喫茶店の前の薄明かりの中に陽子らしい人影がじっと佇んでいた。駅まで来てもらったほうが良かったかなと圭介は後悔した。

寒波のもたらす風が窓をガタガタと震わせる部屋の冷氣の中で、圭介は布団をかぶってほとんど一日中横になっていた。同じことばかり考えてどうどう巡りをしている圭介の頭脳は活力を失っていた。

テレビを点けても見ているのは目だけで、意識は別の所にあった。おれたちもまた、あのスーツ姿の男たちと同じで、本当の建設者ではなかったのだ。圭介の頭の中にはその言葉が渦を巻いて動いていた。

こうして虚脱の四日間が過ぎた。休暇も最終日となると同室の田中が戻ってきた。周囲の部屋も次々と主を迎えて埋まっていき、寮は再び活気を取り戻してきていた。それにつれて圭介の意識も次第に日常の感覚に紛れていった。

会社が始まると圭介の日常は元通りになった。それでも、日に何回かは瞬間的に脱力感に襲われることがあった。あの秋の日々は相変わらず頭の中に居座っていた。

初出から一週間が過ぎた。石油ショック後の狂乱物価が下火となり、スタグフレーションという言葉がジャーナリズムが遊び始めていた。圭介たちのグループは本来の仕事が無く、他のグループの応援に出る者が多くなっていた。

この機会に古い書類を整理しようと、圭介は思い立った。机や書棚の上に積み上げられた書類や資料、図面類はもはや不要な者が多かった。手前の山から順に圭介は片付けていった。不要なものはダンボール箱に放り込み、必要なものはパンチで穴をあけてファイルに綴じた。図面は全部図面箱に返した。

机の上がようやく片付いた頃には十一時を過ぎていた。長い間積み上げられていたために、降り積もった埃が舞い上がり、圭介の口をざらつかせ、鼻が妙に乾いたようで不快だった。

昼までにもう一山やってしまおう。そう思って圭介は、書棚の上の一番手前の山を

抱えて机の上に移した。書類の山を退けた跡に一枚の葉書が残っていた。年賀状だった。年賀状の署名を見て圭介は書棚の上へと手を伸ばした。

年賀状は去年秋山からもらったものだった。型通りの新年の挨拶と日付と社名を印刷したものだった。空いた所に「今年は張り切っております。ご協力をよろしく。腹を割ってやりましょう」と青インクの秋山の肉筆があった。

秋山の古い年賀状を机の隅に置いて圭介は書類の山に取り付いた。山が半分くらいになった頃、庶務係の女子事務員が今年届いた年賀状を配達して回っていた。圭介の机の上に置かれた五枚の一番上に秋山の名があった。

手に取って裏を返した時、課長が圭介を呼んだ。手に取った年賀状を、秋山の古い年賀状の上に重ねて置いて、圭介は席を離れた。

課長席から戻る圭介の表情は重かった。課長は圭介に、今度新しく設置される環境設備部への転籍を告げたのだった。

自分の席に戻ってきた圭介の目に、年賀状の秋山の肉筆が飛び込んできた。―――おかげさまで、うまく稼動しました。尚、来月の人事異動で高木課長は系列の子会社へ出向することになりました。―――

肩をすぼめて階段を上っていく高木の後姿と機嫌良く喋る秋山の顔が、目の奥にだぶった。圭介は二枚の年賀状を手にとると、それをダンボール箱の中へ落とした。

(完)